

西村山地区の県立高校の再編整備計画に係る地域説明会
<河北会場> 記録概要

- 1 日 時 平成 23 年 1 月 24 日 (月) 19 : 00 ~ 20 : 50
- 2 場 所 河北町総合交流センター「サハトベに花」
- 3 出席者
地域の方々 79 名
県教委 教育次長、高校改革推進室長、高校教育課課長補佐、
高校改革専門員、高校改革主査
- 4 内 容 室長から再編整備計画の骨子の説明後、質疑応答
- 5 質疑応答概要
(質問・意見)
 - 谷地高校に商業科があった時は、商業科が谷地高校の特色になっていたので、医療・看護系の進学に対応する「医療・看護コース」を設けることは、今後谷地高校の特色になると考えている。また、現在も医療・看護系への進学者が多い状況を考えても「医療・看護コース」の設置は大変よいことである。
 - 西村山地区の生徒は西村山地区の高校に進学し、定員割れが起きないように、各校の特色づくりが大切である。今回の再編整備計画は、各高校の特色ある学校づくりがよくわかるよい計画であると考えている。
 - 中学校での生徒会活動や部活動、ボランティア活動が評価される推薦入試が谷地高校で実施されている。推薦入試の維持と拡大をお願いしたい。
 - 山形県の公立高校では、定員割れを起こしている高校があるにも関わらず、なぜ2次募集を行わないのか。

(県教委)

 - 公立高校の入学定員を定めるに当たっては、中学校卒業生数の推移を踏まえながら、私立高校との関係を考慮しながら検討している。
 - このことから、定員を定め、定員に満たさなかったからといって、さらに生徒を募集する2次募集は行っていない。
 - 推薦入試の検討については、推薦入学の本来の趣旨が活かされている部分と活かされていない部分があるという指摘をもらっている。
 - 推薦入試を通し、その趣旨や目的に沿って高校に入学し、学校の元気を牽引している生徒もいる。一方で、選抜の過程がわかりにくかったり、生徒・保護者に不安や疑問を抱かせたりしている部分もある。
 - 推薦入試に係る課題を整理しながら、今後のより良いあり方を検討していきたいと考えている。

(質問・意見)

 - 谷地高校が寒河江高校とキャンパス制を組むことは、これまでの谷地高校教育振興会の要望や河北町での2回の地域説明会における町民の意見・要望を考慮したもので、評価できる。
 - 医療・看護コースにおいては、地元の県立病院との交流、県立保健医療大学との連携を強力に進め、生徒の興味・関心を高め進学率の向上を図って欲しい。
 - 英語力の強化については、日本の歴史や伝統、文化を大切にして国際的視野を持った

人材を育成して欲しい。英語の授業の単位数を増やすだけでなく、海外の学校と姉妹校を締結するなど積極的に交流することにも力を入れて欲しい。

- 寒河江高校との交流はよいことだ。小規模校は「芸術」や「理科」の教員の確保が難しいので、専門の教員による出張授業は大切だ。

また、寒河江高校には谷地高校にはないプールもサッカー場もあり部活動の連携も考えられる。授業における教員の交流と部活動における生徒の交流を盛んに行なって欲しい。

- 本県では、義務教育で全国に先駆けて少人数学級に取り組んできたので、高校でも少人数学級を推進して欲しい。

(県教委)

- 医療・看護コースでは、谷地高校のこれまでの実績を活かし進学指導の充実を図りたいと考えている。
- これまでの進学指導はどちらかというと、大学受験の科目を想定した「文系」「理系」という科目選択の指導にとどまりがちであった。谷地高校に導入するコース制では、検討委員会より提案いただいた「フィールド制」という考え方を踏まえ、将来の職業を意識させた進学指導の充実を図りたいと考えている。
- 医療・看護コース以外のコース設定や各コースの教育内容については、今後、学校でのカリキュラムの検討の中で検討する。地元の関係機関や大学との連携は大切なことであるので、進学指導におけるキャリア教育の充実の視点から検討していきたい。
- 英語力の強化については、グローバル化の流れを考えると単に大学受験のためというのではなく、「使える英語」の育成が大切であると考えている。そして、「英語」を学ぶことの喜びにつなげたいと考えている。
- 日本の歴史や文化、伝統の学習が基盤になって、海外の文化理解につながると考えており、カリキュラムの編成においても十分に留意していきたい。
- 本県の義務教育では、少人数学級編成が平成 23 年度に小・中学校全ての学年で実施される。生徒は、小・中学校で少人数学級編成により学んでくるので、高校でも学級の規模を小・中学校と同じにするという考え方は自然である。
- 学級の機能を学習集団と生活集団という二つの面から捉えると、一般的に高校段階では、生徒同士が切磋琢磨する環境が必要であり、生活集団としてはある程度の規模が必要である。一方で、学習集団としては、15 名～20 名程度が学習効果が高いとされている。
- ただ、高校入学後に小・中学校とは違う学級規模に戸惑いを覚える生徒も想定できるので、十分な配慮が必要である。
- 高校における学級規模のあり方について検討することは重要な視点であり、生徒の能力を伸ばすことができる適正な規模について県教委としても研究してまいりたい。

(質問・意見)

- 将来の統合を視野に入れたキャンパス制の導入は、地元の高校の存続・発展を望んでいる立場とは逆行している感じがする。将来の方向をどのように考えて再編整備計画を検討したのか。
- 今回の高校再編整備計画では入学定員が2学級減らされる。中学生にとっては当地区の高校に入学することが難しくなり、ますます東南村山地区の高校に進学する生徒が増えるのではないかと心配はないのか。地元の高校に入りにくくなる心配はないのか。
- 学級を生活面と学習面と二つに分けて考えているようだが、区別して考える部分もあ

るが、そもそも一体のものである。国際的に見て現在の学級規模をどう捉えているのか。
(県教委)

- 高校再編整備の背景にある考え方は、一つは、中学校卒業生数の減少に対し入学定員を適切に定める必要があること。二つ目は、生徒・保護者の教育ニーズを具現化する学科や学校づくりを進めていく必要があること。三つ目は、各高校が地域とつながりを持って特色ある教育を進めてきたことも十分に踏まえる必要があるということである。
- 中学生のほぼ全員が高校に進学している実態を踏まえると、生徒の多様性にもしっかり対応する必要がある。本地区の高校再編整備計画においても、進学指導の充実、専門教育の充実、総合学科の新設による生徒の多様な進路希望への対応という三つを基本に据え、四つの高校の特色ある学校づくりの方向性も併せて示した。
- 統合の時期については、現段階では白紙である。現段階で重要なのは、谷地高校の魅力ある学校づくりをしっかりと進めることであると考えている。
- 地区全体の中学校卒業生数に対する四つの高校の入学定員の割合は、中学校卒業生数が減るため、現在よりも学級減をする平成 25 年度の方が増加する。したがって、今回の 2 学級の学級減で中学生が本地区の高校に入学しにくくなるということはないと考えている。
- 小学校では生活面の指導と学習面の指導が一致しているが、高校では、科目を選択して学習することが増加し、学習集団と生活集団が違う場面が多いなど、義務教育とは違う実情がある。ただ、生活集団の基本となるホームルームが重要であることに変わりはない。
- 学級規模の国際比較では、欧米は 25 名～35 名ぐらいが平均であると記憶している。

(質問・意見)

- 寒河江高校は単位制になるようであるが、他県の導入例を見ても期待できる。寒河江高校が単位制の導入によりさらに魅力が上がり、志願者が増加することも考えられる。そうしたことを想定すると、寒河江高校は西村地区だけでなく東南村山地区も含めたより広域な範囲から生徒が通学してくることを想定して、新しい学校づくりを進めていくのか。
- 具体的な単位制導入の方向性は、説明にあった他県の導入例を基本に考えていくのか。

(県教委)

- 入学してくる生徒のほぼ全員が大学進学を希望しているという寒河江高校の実態を踏まえ、単位制による教員の加配を活用した進学指導の充実を図りたいと考えている。
- 単位制の導入による寒河江高校の志願者の増加については未知数である。
- 単位制を導入した進学指導の充実の具体的方向性は、寒河江高校にふさわしい教育の展開を、他県の先進県の事例も調査・研究しながら、学校の教職員を中心に魅力あるカリキュラムづくりを進めていく。
- 単に大学に合格できる力だけではなく、知識を活用できるいわゆる探究する力も含めて育成し、地域のみならず、本県、世界で活躍できる人材を育てたいと考えている。

(質問・意見)

- 西村山地区の約半分の生徒が東南村山地区の高校に通学している現状を県教委は容認するのか。
- 西村山地区の総人口は約 9 万人であり、山形市は約 25 万で人口は約 3 倍である。一方、山形市内には高校が 14 校あり入学定員は、西村山地区の高校の入学定員に比べ 6.5 倍

である。

- 中学校卒業生数は確かに減少しているが、本地区の高校に手を加えれば、学級減をする必要はないと考えている。
- 約半分の生徒が東南村山地区の高校に通学しなければならない理由は、西村山地区の高校の入学定員が削減されるからであり、山形市に行かざるをえない現実がある。
- 本当は地元の寒河江高校に入学したかったのであるが、5学級に減らされたから、山形市内の高校に通学させているという声もあった。
- 東南村山地区の高校に通学している生徒の中に、本当は西村山地区の高校に入学したかったのであるが、受験で合格できるか心配だから、やむなく山形市内の私立高校に専願で進学している生徒がかなりの数に達していると考えている。
- どうしたら、本地区の高校に入学したい生徒が本地区の高校で学べるのかを、学級減以外の方法で検討するのか県教委の責任ではないか。
- 本県の公立高校と私立高校との入学定員の割合は、7:3になっているようであるが、秋田県では9:1であると聞いている。
- 本県では、これまで約3割の生徒が私立高校にお世話になってきた歴史的経過があるので、私立高校だけにしわ寄せするのはよくないが、せめて7:3を8:2にするとか、公立高校の2次募集を認めるということがあってもよいと考える。
- 山形市内の私立高校には一校で、西村山地区の四つの高校の学級数に匹敵する学校もある。県立高校はどんどん統合されるが、私立高校は新しい校舎を建てたという話は聞くが、統合したという話は聞いたことがない。
- 発言したい人は多くいると思うが説明会では時間が気になってしまう。会場を別に設定して対話集会のようなものを開催して欲しい。

以上